時空を超えて、慈恩寺の仏像に出合う

抑々慈恩寺の創建は、神亀元年（七二四）僧行基が諸国巡錫の砌、この地の景勝なるを見て都に帰り、聖武帝に奏上、天平十八年（七四六）勅命によって婆羅門僧正が開山し、弥勒菩薩を本尊として、寒江山大慈恩律寺と号したと伝える。

延久元年（一〇六九）以前には、寒河江荘が藤原摂関家の荘園として成立していたとされ、慈恩寺は藤原氏の庇護を受ける荘寺的性格の寺院であったと考えられる。

天仁元年（一一〇八）鳥羽帝の宣勅によって奥州藤原基衡が当寺を修営し、仁平年中（一一五一～一一五三）奈良興福寺の僧願西上人が再興、諸堂造営を行なった。京文化を伝える平安後期の仏像は十四体を数え、当時の慈恩寺を物語るものである。

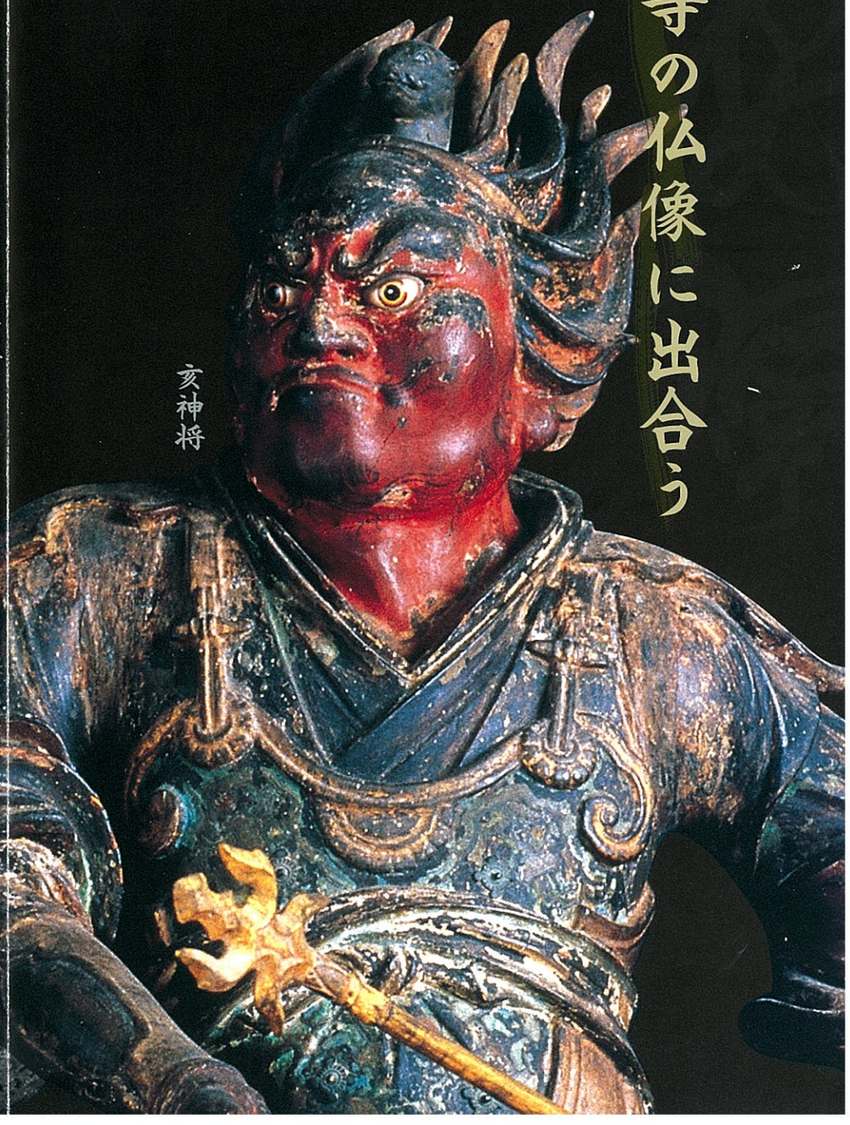
その後、文治元年（一一八五）後白河院の院宣と右大将頼朝の下文を帯して高野山から真言僧弘俊阿闍梨が来山し、山号を瑞宝山と改めた。鎌倉以降領主大江氏の庇護をうけ、室町の末大江氏が滅亡すると最上氏がこれに代わり、元和八年（一六二二）最上氏改易後は幕府より東北一の寺領二千八百十二石余の御朱印を付せられ、勅願寺として又鎮護国家の祈祷寺として崇敬された。明治維新後御朱印が停止され、一山は衰亡した。

慈恩寺の組織は、江戸時代、宝蔵院、華蔵院、最上院の三か院と四十八坊からなる一山寺院であった。また、その宗派は先ず法相が入り、天台、真言、修験の外時宗があり、禅宗の影響もみられる。終戦後一山は独立して慈恩宗となり本山慈恩寺として現在に至っている。

慈恩寺は平成二十六年に旧境内が国史跡の指定を受け、国指定重要文化財、県市の指定にかかる多くの文化財を有し、東北有数の巨刹としてまた霊場として人々に尊崇されている。

郷目貞繁筆絵馬【市指定文化財】
郷目右京進貞繁は、寒河江大江氏の家臣で東北最古の武人画家。躍動感のある描写から、馬が絵を抜け出して走り回ったと伝わる。

天女図
本堂外陣の鏡天井には八方睨みの龍を中央に、艶やかな六面の天女図が迎える。



薬師三尊と十二神将【国指定重要文化財】
薬師如来及び日光・月光菩薩。
十二神将は護法神であり、躍動的な彫刻は全国的にも第一級で、日本を代表して海外展にも出陳されている。